

■（６９）記事に書くかどうかの境目は…

受験シーズン真っ盛り。その幕開けだった大学入試センター試験２日目の朝に新聞社の電話が鳴った。問題の配布ミスで娘が大混乱しているとの訴え。大学入試センターにも相手にされなかったのが、新聞社に連絡してみた。何とかして欲しいとの内容だった。

最後の駆け込み寺として、新聞社に「記事にして」と連絡してくる人は少なくない。話を聞くと、確かにかわいそうだったり、頭に来る状況だったり。記事にして、「相手」を追い込んで欲しいという希望もわからないわけではない。でも、ちょっと待った！すべてが記事にできるわけではない。ひとつの境界線は「私憤」か「公憤」か。個人的なトラブルを紙面上で展開されても困る。その出来事を報じることは社会性があるかどうか、が判断の分かれ目になっている。十分に話を聞いたうえ、現時点で記事にはできない、と答えると、大方の人は「新聞社も見捨てるのか」と落胆するが、割り切るしかない。

冒頭の電話。その後、配本ミスが全国各地で起きていることが判明した。新たに導入した試験方法が複雑過ぎた。受験生の影響を伝えるエピソードとなって紙面に載った。（山）